



キャンパス点描
— 2号館 —



第18号

2022年
12月25日発行

日本大学国文学会

同窓会誌



ご案内	
12F	哲学科研究室
11F	哲学科研究室・事務室 演習室
10F	史学科研究室
9F	史学科研究室
8F	史学科研究室・事務室
7F	ドイツ文学科研究室・事務室
6F	ドイツ文学科研究室 演習室
5F	総合文化研究室・事務室
4F	体育学科研究室
3F	演習室 2301～2304
2F	演習室 2201～2204
1F	ホール
B1F	機械室



2号館は十二階建てのキャンパス内では一番の高層建築。旧称、研究棟。本誌では



第5号以来二度目の登場となる。竣工は一九七九年九月五日。人文系6学科の研究室が入り、国文は8・9階にあった。教員研究室は個室ではなく、それが実現したのは二〇〇二年に7号館へ移転してからのことになる。1階には共有スペースの「タワーホール」と喫茶室があり、後者は現在、食堂メニュー中心の売店になった。

OB・OGだより

学びを活かす場所

川井 恵理

国文学科卒業後、市役所で働いています。公務員というと、まずは窓口で事務を担当する人たちの想像されるかと思いますが、私の当初の配属先は、子ども関係のイベントを企画・実行する部署でした。たとえば、夏にはキャンプや合宿を、秋には講演会や音楽会などを開催してきました。

それ以外の業務として、国語の教員免許を取得しているという理由で、小中学生作文コンクールの担当にもなりました。仕事内容は、審査基準の見直しから関係団体への連絡調整、作文の審査など広範囲にわたります。国文学科で学んだのですから、普通の人よりは国語力に自信はあったものの、公務員の仕事として直接役立つようなことがあるのだろうか、と最初は懐疑的でした。しかし、審査基準や作文をみると気になるところが出てきて、進んで意見を述べる機会が増え、上司のサポートもあって、審査

基準改正に大きく貢献することができました。また文書作成の面でも、卒論の執筆過程で修得したことが助けとなりました。こうした経験を通して、公務員の仕事の中にも、自分の得意分野が活かせる場があることを身をもって知ることになりました。

現在の仕事がどれほど社会の役に立っているのか、それはわかりませんが、公務員という仕事は、想像していた以上に多様な活躍の場が用意されているようです。これからも、地域の人々の暮らしと密接にかかわりながら、実践を通じて学び続けていくことになります。

〔平成31年国文学科卒業〕

ドナルド・キーンさん

長谷川 陽子

神奈川県近代文学館にドナルド・キーン展を見に行った。キーンさんに興味を持ったのは、武内佳代先生の「三島由紀夫と女性誌」の講義を受けてからだ。先生は三島由紀夫賞受賞時に審査員長のドナルド・キーンさんと対談した話をされた。キーンさんはスウェーデンアカデミーの依頼を受け、ノー

ベル文学賞に川端康成を推薦した。最初三島由紀夫を考えたが、日本人は長幼の序を重んじる民族だからまずは川端を、若い三島は次の機会があるだろうと考えてのことだった。後年三島が自衛隊市ヶ谷で事件を起こし自決した時、「もしノーベル文学賞を三島が受賞していたら、どうなっていただろう」と煩悶したそう。私はキーンさんがノーベル賞に関わり、日本人の心情に添って考えていたことに感心した。

キーン展では三島と一緒に写真や手紙が多く展示されていた。二人が親友だったことが分かった。そして私の目を引いたのは三島からの最期の手紙であった。自決の翌日、家族から投函されたものだ。キーンさんはニューヨークで事件を知り、その後亡き人からの手紙を受け取ったのである。「小生の行動については全部わかっていただけたと思う」に続き、キーンさんに対する感謝と『豊饒の海』翻訳完成を見届けてほしい旨、そして（アメリカに戻る前に）会いに来てくれた時は「心の中で別れを告げていた」と書かれていた。これを読んだキーンさんの無念さと思うと息が詰まった。三島の死に急ぎに腹がたった。

〔令和4年文学専攻（国文学）卒業〕

交 差 点

至福のひとつとき

坂本 恒子

文理学部には「社会人聴講生制度」が設けられています。これは、地域に開かれた生涯学習の場として、「社会人のみによるクラスを編成するのではなく、本学部学生と共に授業に出席し、学習する」(学部サイト)ものです。多少の制約はあるものの、全学科の授業から聴講科目を選べるという他大学には余り類をみないユニークな制度として、三十年余りの歴史があります。

私の聴講生歴は、募集中止となったコロナ禍の二年間を除いて、四年目になります。聴講生としてはまだまだ新米のようです。半世紀ぶりに大学に通い、それも、孫世代の若者たちと席を並べての授業は、多少の気恥ずかしさはあるものの、とても新鮮で、学生時代にタイムスリップしたかのような時間です。今は国文学科と史学科の授業を聴講させていただいております。

私の大学時代の専攻は心理学でしたが、

美術や考古学にも関心があり、学芸員の資格も取得しました。展覧会にもよく通いました。「ミロのヴィーナス」「モナ・リザ」「民衆を導く自由の女神」などは、かつて東京にやってきた名作です。東京は今も昔も、居ながらにして世界の至宝に触れられる刺激的な街です。それらを満喫しつつも、いつとはなしに私の興味は、日本の古典や古典美術、特に古筆とその料紙の繊細さ、さらには詩絵や螺鈿へと向かっていきました。現在はその世界をもう少し豊かに広げたいと思い、大学での聴講科目を選んでいきます。

実は、私の実家には、和綴じの本や、戦前までの東京や大阪で興行された歌舞伎や浄瑠璃、演劇などのパンフレット、その他江戸末期から昭和初期にかけての雑多な印刷物が多数保存してありました。これらは先年、国文学科に寄贈させていただきました。だが、幼少期に目にしたそれらカラフルな挿絵や、意味はわからなくても踊るような文字が、子供心にも面白く、「ときめき」のようなものを感じていたのかもしれない。それが埋み火のようにくすぶり続けていて、後年、頭をもたげてきたようです。

それにしても、自分が主體的に興味をもつて臨んだ学習がこんなにも充実し、楽しい

ものかと、まさに「遅れてやって来た向学心」に、漫然と過ごしてしまつた学生時代への反省が重なります。

私の年齢では、聴講生として学んだことを、仕事などで直接活かす機会はありませんが、それは、日常の中でしばしば経験する「点が線になり、線が面になる」瞬間に繋がっているように思います。

これからは自分や家族の健康など、様々な状況が年々厳しくなっていくことでしよう。せめて「今を、精いっぱい食欲に」、もうしばらくは、聴講生証をかざして文理学部の門をくぐりたいと思っています。

コロナ禍による二年間のブランクを経たキャンパスでは、三々五々、談笑しながら行き交う学生たちの姿がみられるようになりました。これまで、変則的な学生生活を送らなければならなかった彼らに、これからは学業と合わせて、生涯の友人に出会える場としての大学生活を、人生のかけがえない時間として大切に過ごしてほしいと願っています。

私も、大学の歴史を刻んだ構内の巨木や、四季折々の花を愛でつつ「至福のひとつとき」を求めて参ります。

(社会人聴講生)

談話室

文字の魅力、文字の魔力

堀井 一摩

数年前のこと、授業が終わって質問に来た学生から、「先生はひょっとして文字フェチですか？」と訊かれたことがある。唐突な質問に面食らったものの、思い当たる節がある。

学校の門前に小学生たちの書道作品が掲示してあると思わず足を留め、払いがのびやかだの、全体のバランスが悪いだのと自分の汚文字を棚に上げて一品評してしまう。学生のリアクションシートの文字が美しいと思わず見入ってしまう。ついでによい点をあげたくなってしまう（あげないが）。授業時間が許すならば、レジュメではなく、すべてを板書で指導したい。チョークで黒板を打つ、硬くかつしなやかな触感をいつまでも感じていたい。マイクロソフト Word の MS 明朝が許せない。論文が書けないのは、学会誌の投稿フォームがいつも MS 明朝に指定されているせいなのだ。これでは

書ける論文も書けるはずがない。

ただ、板書の字がきれいなわけでもなし、なぜその学生が私を文字フェチだと思うのか不思議だった。尋ねてみると、「異様に文学作品の漢字にこだわっているから」とのこと。「異様に」は余計だが、その日はたしかに漢字に注目した分析を学生の前で展開したのだった。

泉鏡花の代表作のひとつに「草迷宮」という化け物屋敷譚がある。作中、屋敷の所有者であった鶴屋喜太郎の正妻がお産をする場面がある。易者は彼女の難産を「死霊の祟」と占い、魔祓いをしながら彼女を産所へと運んでいくが、実はこの一週間前、喜太郎が孕ませた愛人が出産の際、赤子とともにこの産所で亡くなっていたのである（実にひどい男である）。その産所に運ばれる途中、螢がむらむらと飛んできて、寝ている正妻にたかってくる。

現在入手可能な版はどれも旧字を新字に改めているため、この場面の象徴的意味合いが読者に伝わりにくい。鏡花が書いた文字は「螢」ではない。「螢」である。「螢」は会意形声文字で、上部（音「ケイ」）は火でまるくまわりを取り巻くさまを表し、これに虫を加えて、火のように光を発する虫、

すなわちホタルを表す漢字となる。

すると、「死霊の祟」と言われた難産の正妻にまといつく「螢」は、明らかに一週間前に死んだ愛人と赤子の「死霊」であり、二人の人の魂の光が「螢」の二つの「火」によって象徴的に表されているのだ。出産はしたものの、正妻と赤子はむなしくなってしまう。「口惜い」と無念を残して死んでいく正妻とその子もまた、「螢」になっていくのだろう。

ことほどさように、鏡花は正字総ルビで読まねばならないのだと一かつて授業で聞いた私の指導教員の受け売りを一教壇で熟っぽく語っていたのである。

なるほど、この学生の言う通り、たしかに私は文字フェチかもしれない。考えてみれば、私は漢字、平仮名、片仮名、ときにはアルファベットや記号が混在する日本文学の字面が好きだし、英文学から日本文学に転向したのも文字に魅了されたからなのかもしれない。「魅」を『漢字源』で引いてみると、「鬼+音符末（はつきりわからない）」の会意兼形声文字であるらしい。してみると、私はえたいのしれない文字の魔力に魅入られているのだろう。

〔国文学科教員〕

読

書

案

内



旅に連れ出してくれる本

徳泉 さち

本は知らない場所、時代に旅する扉を開いてくれる。大学に入って間もない頃に読んだ石田幹之助『増訂 長安の春』（平凡社、一九六七年）もその一冊である。本学史学科でも教鞭をとった石田幹之助は著名な東洋史学者であるが、本作は表題のとおり唐の都、長安の生活や風俗をテーマにした論考が集められている。古都を舞台としながらもそこで暮らす人々の悲喜交々のざわめきが聞こえてくるかのような文章に初めて読んだときから魅了された。唐代の詩文を縦横無尽に引用しながら、人々が何をどのように飲み食いしたか、季節ごとの娯楽、流行していた化粧や酒樓の様子に至るまで、あたかも長安城坊の路地裏を歩いてきたかのような気持ちにさせてくれる。古色蒼然とした漢文からこれほど色彩豊かな世界が描きだされることに驚かされ、いつかはこんなふうに漢文史料を咀嚼できたらと遠く憧れ続けている。とりわけ、国際都市長安に流入した外来文化を扱った章が好きだ。イラン系のソグド人が舞ったという異国情緒溢れるダンス、西域から将来された眩く不可思議な力を秘めた玉石の因縁話、珍奇な動植物や香料などのエピソードが匂い立つような筆致で記されている。

この本に誘われるようにして、大学一年の夏休みには中国語もできないまま西安、敦煌、トルファンからウルムチまで西へ西へと長い旅にでかけた。そして、後には卒論も修士論文も長安城内に残る唐代

の文物をテーマに選んだ。

もう一冊、松岡譲『敦煌物語』（講談社、一九八一年）を取り上げたい。筆者は夏目漱石の門弟として知られるが、この本は四世紀より造営された仏教遺跡である敦煌莫高窟から流出した文物の流転に関する史実を小説仕立てにしたものである。二十世紀初頭、イギリス、フランスなどの欧米列強国は競うように地図上の空白地帯、中央アジアに探検隊を派遣した。彼らはタクラマカン砂漠をラクダに乗って彷徨し、道中で遭遇した古代遺跡からの発掘品を略奪同様にして本国へ持ち去った。本書では特に敦煌石窟に秘蔵されていた膨大な古写経や仏画などの遺宝をめぐって繰り広げられる各国探検隊たちの攻防がスリリングに展開される。古洞や砂漠に眠っていたはずの古代文書や木簡竹簡がヨーロッパの図書館や博物館に収蔵されている経緯をよく伝える本である。

この物語を読んで以来、数奇な運命を辿ったこれらの文物にひどく心惹かれ続けていた。その思い止まず、博士課程の時にはヨーロッパに点在する中国古代美術コレクションを巡ね、欧米における東洋研究に目を向けるようになった。今でもロンドンやパリの図書館の一室で砂がこびりつく木簡を手にし、墨痕鮮やかな経巻を広げた時の興奮は忘れられない。

この二冊の本が遙かな時を隔てた文物に出会わせ、遠い異国への旅に連れ出してくれたのである。

〔総合文化研究室教員〕



袴田ゼミ

(袴田光康先生担当)

金曜5限



—ゼミ生全員集合！ 2022年11月18日—

袴田ゼミでは『源氏物語』を中心とした平安時代の物語や説話の研究を行っています。歴史・先行作品・ジェンダー・語りなど様々な視点から古典作品の魅力にアプローチしていく多様な研究スタイルがゼミ

の特徴です。

授業では、『源氏物語』の中の一つの巻を一年を通して読んでいきます。割り当てられた担当範囲を各自が発表する演習形式です。研究発表に際しては、江戸時代の注釈書『湖月抄』と現代の三つの注釈書を調べます。『湖月抄』は難解な部分もありますが、意味が理解できると、昔の人はこんな風に『源氏物語』を解釈していたのか、ということがわかっておもしろいものです。

発表後には先生のコメントをはじめ、ゼミ生同士、質問や意見を交換する時間が設けられています。自分の気づかなかった問題点や異なった見解を知るとは、より客観的に考えを深めるきっかけとなります。

卒業論文に関しては、三年後期から各自の研究テーマ探しが始まり、先生とも相談しながら、四年前期までにテーマや研究方法、論文のスタイルなどを具体的に決めていきます。これまで研究対象となった作品は『源氏物語』『今昔物語』『とりかへばや物語』『大和物語』などで、また比較対象の作品には『ロミオとジュリエット』『あさきゆめみし』『映画 源氏物語』などがあります。私自身も『伊勢物語』や『大和物語』などの歌物語における「文付枝」について

の卒論に取り組んでいます。提出した卒論は、最終的に全員分をまとめて一冊に製本して貰えるので、学生時代のよい記念になります。

ゼミ合宿などは、コロナ禍により控えてきましたが、前期最終日には打ち上げを行い、夏にはサントリー美術館の展覧会「歌枕—あなたの知らない心の風景」を見学しました。このように少しずつでもゼミ活動が活発化していけば、三年生と四年生の交流も一層深まっていくことでしょう。

〔四年・鈴木佳澄〕



—卒業式後のひととき 2022年3月25日—

国文学科ヒストリー 18

1969年(昭和44年)

- 3月 1月のチェコの学生について、フランスで女子学生が政治的抗議の意思を示すべく焼身自殺して世界に衝撃を与えた。
- 4月 文理学部キャンパスのロックアウトが続き、授業を開始できないまま新年度が始まった。
- 5月 仮校舎でまず新一年生の授業が始まり、ついで前年度分の授業が行われ、二年生以上のその年度の授業開始はそのあととなり、年度末までこたこたが続いた。
- 7月 アポロ11号、月面着陸に成功。
- 8月 アメリカでウッドストック・フェスティバルが開催され、四〇万人を超えるロックのコンサートとして事件になった。
- 12月 一年ぶりの『語文』第32輯の編集後記には、遅延のお詫びとともに「研究室は閉鎖したままで、研究、授業とも支障が多く、彙報の中にもあらわれているようにまさに多事多難であった」とある。



アポロ11号月面着陸



文理学部校舎 中庭と旧2号館・3号館

分の集中授業を前年度の1〜3年生を対象として行っていた。後学期授業が始まったのは二月のことであった。



騒然とした新宿駅東口

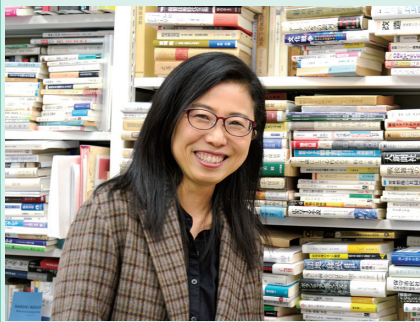
連射殺事件を起こした永山則夫が逮捕された。七月にはアメリカのアポロ11号が人類初の月面着陸を果たした。九月には新東京国際空港の建設が成田で始まった。反対派による成田闘争が本格化した。一〇月には国際反戦デーの二日に新左翼各派と機動隊の衝突があいつぎ、千五百人を超える逮捕者が出た。十一月、佐藤栄作首相の訪米阻止闘争により、逮捕者は二千人超に及んだ。ニクソン大統領率いるアメリカがベトナム戦争に傾斜するなか、新たな軍事同盟の懸念があったからである。佐藤はその引き換えにアメリカで沖縄返還合意をとりつけた。この年、日本の西ドイツを抜いて世界第二位に上がり、高度経済成長の時代が始まろうとしていた。

【学内外の動き】キャンパスが学生に占拠されているため、一月より千葉県成東校地の仮校舎で4年生の集中講義を行い、ようやく卒業を確定することができた。新年度になっても、キャンパス占拠がまだ継続中のため、五月になって府中の仮校舎にて新一年生を対象とした授業を開始。六月には授業ができなかった前年度生を対象として行った。九月、二〇四年生を対象とした当該年度の

【国内外の動き】世界でも日本でも若者たちの反乱が続いていた。チェコやフランスでは若者が焼身自殺して政治的抗議の意思を示すなど、衝撃的な行動があいついだ。日本では

研究室訪問 一問一答

- ①これまでで一番の思い出といえば？
研究休暇の時、バックパッカーになれたこと。14カ国の国境をこえました。
- ②趣味は何ですか。
ことばを学ぶこと。中国語にチャレンジしたい。
- ③好きな俳優は？
キム・ヘス。
- ④苦手な食べ物はありますか。
数の子、いくら。納豆は最近になって食べられるようになりました。
- ⑤今一番欲しいものは？
掃除ロボット。



高榮蘭 (近現代文学専攻) 研究室

掲 示 板

国文学科短信

今年度（2023年1月）から卒業論文の提出方法が変わる。これまでは事務室へ提出していたものが、教育支援システム blackboard 経由のデータファイル（PDF）の直接送信となる。提出期間は1月11日（水）10:00～12日（木）15:00。主査・副査分の計2部提出（送信）は従来通りである。

通信教育部については提出方法に変更はなく、ガバットファイルで綴じたものを通信教育部へ提出する。ただし、副査制度が廃止されたことにより、提出部数は1部でよいことになった。今年度9月から適用済みである。

3年生の君塚早さんが、公益社団法人全日本書道教育協会主催「令和4年度第104回書教展」大学・専門学校部門で、文部科学大臣賞を受賞された。

最終講義のご案内

○荻野綱男先生 2023年2月25日（土）

○紅野謙介先生 2023年3月11日（土）

定年退職後に引き続き特任教授として学部教育に携わってこられた荻野・紅野両先生の退任にともなう最終講義が上記の日程でおこなわれます。

卒業生、在学生、関係者の皆様のご来場

をお待ちしております。

時間・場所などの詳細は学科サイトでご確認ください。

文学部短信



上の写真は前号「キャンパス展望」でとりあげたサクラスポーツ&ジムナスティックスセンターの内部で、2階の体操場。

下は解体された第2体育館の跡地を2号館側から見た様子。



同窓会員募集のご案内（郵便振替口座 00180-3-11183 日本大学国文学会）

国文学会では国文学科の卒業生（大学院・通信教育部を含む）を対象に同窓会員を募集中です。学会行事へ参加していただけるほか、機関誌『国文通信』を年2回お届けします。会費は郵便振替にて1,000円（2年分）から。振込用紙に卒業年次と「同窓会員入会」と明記してご送金くだされば手続き完了です。国文学科サイトにも詳しい案内記事を掲載しています。

第18号

2022年
12月25日発行

日本大学文学部国文学科
国文通信編集委員会
〒156-8550
東京都世田谷区松上3-25-40

国文通信編集委員会
紅野謙介・鈴木功真・竹下義人

みなさんに撮影していただいた。

（義）

編集後記

後期も対面式授業が維持され、編集作業も比較的順調に進んだ。今号も執筆者の皆様のご協力を得て大過なく発行できたことを喜びたい。

◆11月中旬以降、コロナ感染を理由に欠席する受講生が急増し、第8波突入を実感することになった。ワクチン接種は5回目となり、国産の治療用飲み薬も緊急承認されたようだが……。◆15号から掲載を見送ってきた「ゼミだより」を対面式授業の再開を契機に復活させた。上段の集合写真は副手の杉本なつみさんに撮影していただいた。

◆18号をお届けする。

電子メールは国文学科サイト内に設置してある「お問い合わせ」フォームから送信できます。感想などもお寄せください。

本誌では皆様からの投稿を随時受け付けています。エッセイのほか、同窓会の案内や報告なども歓迎します。詳細は本誌編集委員会宛、お問い合わせください。